

本号のテーマ：「2020を目前にして考えること」

○ はじめに

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2019年(平成31年、〇〇元年)の幕開けです。

皆様にとりましてよい年でありますように。

ところで今年は平成最後の年。日本にとって大きな節目を刻むこととなりますが、私はもうひとつ、2020年の前年であるということに大きなこだわりをもって新年を迎えました。2つの点で大事にしたい年であると考えています。



1 2020 東京オリンピック、パラリンピックを前に

早いもので、2016 リオ五輪から3年が経とうとしています。いよいよ来年は東京オリンピック、パラリンピックの開催で、世界中から大勢のお客様が来日されます。日本のアスリートの大活躍を期待するのは当然ですが、私はこの機に、来日された皆さんが日本での大会のすばらしさ、そして日本のすばらしさをたっぷりと感得していただけるよう意を尽くしたいものだと考えています。とりわけ、あれだけPRした「おもてなし」が表面的なもので終わることのないように、「おもて」も「うら」もない本物のおもてなしをしたいものです。

「本物の」とふれたところで、ぜひ紹介したいエピソードがあります。

昨年11月、海外の友好都市であるモンゴル国ウランバートル市スフバートル区から8名の中学生が見え、本市小中学生との交流や異文化体験、諸施設の見学等を行いました。市役所を表敬訪問された時のことです。日本の佐久市を訪れての感想を求められて、こんな発言がありました。

「他の国にも行ったことがあるが、映画やテレビ等で見ると美しい様子と実際との違いに驚くことがある。しかし日本の佐久市は発信されている美しさと実際とが違わない。どこを訪れても街がきれいである。」というもの。

道路にゴミはないし、家庭だけでなく、学校や公共施設のトイレがきれいで清潔であることに感嘆し、述べられた感想でした。

また、ゴミをやたらなところに捨てない日本人のマナーのすばらしさは、アメリカ大リーグの野球中継でも紹介され賞賛されたことがあります。2018 新人王に輝いたエンジェルスの大谷翔平選手のベンチでの所作についてでした。大リーグの選手の中には、噛んでいたガムをベンチで所かまわず吐き出す方が少なくありませんが、その光景に不快な思いをもっておられる方は私だけではないと思います。大谷選手はちゃんとゴミ箱行きの紙コップに品よく入れており、その所作が注目されたのです。

さて、世界各国から見えるお客様に本物のおもてなしをと先述しましたが、そこには私たちが誇りとする文化が感じられることが重要だと考えます。特に、見えるところだけを整えるのではなく、見えないところや見えにくいところの整えも大事にする日本の文化に誇りを抱きながらお迎えしたいものです。残念ながらこのところ、見えないところを手抜きしたり、ごまかしたりする企業経営が我が国でも散見されますが、2020 東京オリパラは、やはり見えないところのあり方を大事にする日本の価値観が改めて注目され、信頼回復の機にもなればと期待しています。



〔エストニア訪問団に同国第2国歌を合唱し歓迎〕

本市も友好都市から姉妹都市提携へと発展させようとしているエストニアのホストタウンとして、オリパラの本番を迎える前の年から本物のおもてなしの具体的に想いをめぐらし、10万市民の熱い心を結集させようではありませんか。

2 2020 新学習指導要領本実施（小学校）を前に（中学校は 2021）

2017 年 3 月に告示された学習指導要領が、小学校ではいよいよ 2020 年度から本実施となります。中学校では道徳が 2019 年度から、他は 2021 年度から本実施です。

小中学校とも、既に昨年からその移行に向けた措置を講じて教育課程を実施しており、移行によって、学ぶべき内容が欠落してしまうようなことのないように万全を期しております。加えて、新しい学習指導要領の本実施を目前にして、とりわけその改訂の趣旨を汲みながらの授業づくりに意を用いることが重要であり、先生方は今そういう視点に立って改めて実践研究を積んでいるところです。

この「改訂の趣旨」について、中央教育審議会の教育課程部会長を務められた無藤隆氏は、ある新聞社の取材に対し次のように語っておられます。

「今回の改訂に向けた議論の出発点は、『劇的に変化する社会の中で、子どもたちに必要とされている力とは何か。学校はその力を育てるために、どんな教えを実践しなければいけないのか』ということだった。(略)

5年後、10 年後さえ予測できない社会を私たちは生きている。若い世代には、そんな『未知の課題』に向き合い、未来を切り拓く力が必要だ。そのために学校教育は何をすればいいのか。それが、今回『主体的・対話的で深い学び』という言葉で表現される授業の実践だ。受け身の授業ではなく、議論や体験学習を通じて、子どもたちに『自ら学ぶ方法』を教えることが重要になってくる。」(略)

(文責：糊澤)

告示前に盛んに話題となった‘Active Learning’について、告示段階では「主体的・対話的で深い学び」という表現で登場したわけですが、無藤氏が語られているように今回の改訂の大きな柱です。実は義務教育にあっては、これまでも子どもたちが主体的・能動的に学ぶ‘Active Learning’は、その言葉を遣わないまでも目指すところでありました。しかしながら、目指すことと実際とは必ずしも一致しているわけではなく、今回の改訂で改めて学びの原点に立ち返ることができそうです。「受け身の授業ではなく」ということが、日本中で再認識されることに大きな期待感を抱いています。

さて、そういうわけで新学習指導要領が目指す学びは、現在も、そしてこれからも大事にしたいことです。今、同要領が本実施となる 2020（小学校）、2021（中学校）を前にして、移行措置を確実にやっていくことはもちろんですが、授業づくりにおいては、その改訂の趣旨に立って「主体的・対話的で深い学び」の具現に向けた日常の授業改善に真正面から取り組むことが重要です。本実施になってから腰を上げる問題ではないのです。



○ おわりに

本職を拝命してから折にふれて発信してきたことがあります。それは、「身を乗り出して前のめりに学ぶ」学校や社会をつくっていきたいという願いであります。「前のめり」という言葉には悪い意味もありますが、ここでは、誰かが止めようとしても止められないほど学びが本物になっている状況を指しています。

2020 を目前に、本物のおもてなしに向けたありようと本物の学びを希求し、この機をとらえて自分（たち）に磨きをかける 2019 にしたいものです。